〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第87号 2014年10月1日

資料見聞

元親の起請文

日本サッカー協会のエンブレムにも採用されているヤタガラス。実は古文書のなかにもカラスが使用されているのをご存じでしょうか。

戦国時代、離合集散を繰り返す各地の領主や大名たちが、同盟関係を結ぶとき、証として取り交わしたのが起請文（誓詞）です。その際、料紙として「牛玉宝印」（牛王とも書きます）という護符が多く使用されましたが、この牛玉宝印に神の使いとされる烏が多数デザインされているのです。

この史料（写真）は、土佐を統一した長宗我部元親が、阿波侵攻を開始して数年後、新たに盟友となった日和佐肥前守（日和佐城主）に宛てたものです。右端に「起請文」の三文字があることから、ただの書状ではなく、誓詞だったことが分かります。

特別展「長宗我部氏と宇喜多氏」重要展示資料
長宗我部元親起請文　天正６年（1578）９月12日
日和佐肥前守宛　浜秀孝氏旧蔵

料紙には、通称カラス文字で表現された「神蔵（倉）牛玉宝印」の六文字が刷られています。典型的な熊野系の牛玉宝印で、裏面に文章が認められています。「去（年）以来」から始まる前書には、「…お互いに裏切ることなく交わり、密接な関係であることは、この御神書のとおり明らかなことです。もちろん我々のことは（これからも）決して軽んじません」とあり、残り二行に「もしこの誓いを破ったならば日本国中の神々、とりわけ八幡大菩薩の神罰を受けます」と書かれています（神文）。

当時は右筆による代筆が常識でしたので、元親本人は署名と花押のみを自署したものと思われます。「長宮」として省略することが多い名乗りも、起請文の性格上「長宗我部宮内少輔」と正式に書いていますが、微妙に曲がっていますね。緊張していたのでしょうか。何せ牛玉宝印に記した誓いを破れば真っ先に熊野の神々の罰を受け、地獄に墜ちると信じられていた時代。とても平常心ではいられなかったでしょう。

とはいえ、軍記物語のなかにみえる、起請文に関するエピソードにはその効力を疑問視するものもみられます。

例えば、比較的脚色が少ないとされる『元親記』には、阿波国の勝瑞城を包囲された十河（三好）存保が、降伏の条件として、二度と元親に刃向かわないことを誓った起請文を書かされる場面があります。真偽を見極めるため、わざわざ検使まで派遣してのセレモニーだったようですが、結局城を脱出した存保はその後も讃岐で抵抗を続けます。

起請文といえども、戦国の世にあってはただの紙切れにすぎなかったということなのかもしれませんが、案外牛玉宝印を料紙とした起請文ではなかったのかもしれません。

元親自身も、誰かれ構わず牛玉宝印による起請文を乱発していた訳ではありません。交渉相手と状況によっては、白紙による起請文も使用していたことが最近の調査で分かってきました。

日和佐氏との変わらぬ親交を神々に誓った元親。その後の両氏の関係については、是非展示室で確認してみてください。

（野本）

高知・岡山文化交流事業Ⅲ

特別展「長宗我部氏と宇喜多氏
―天下人に翻弄された戦国大名―」によせて

平成26年10月11日(土)～12月7日(日)　野本亮・大黒恵理

今秋、久方ぶりに長宗我部氏をテーマとした特別展を開催します。しかも今回は、岡山県立博物館との共催により、備前の戦国大名宇喜多氏も同時に取りあげますので、質・量ともにこれまでにない重厚なものになります。

現在の南国市を本拠地とする長宗我部氏とは、どのような系譜を持つ氏族なのでしょうか。古い時代のことはよく分かりませんが、「…戦国時代の当主長宗我部元秀（兼序）は、居城（岡豊城）を攻められて自刃。一時滅亡の危機に瀕した。しかし、その後帰還した国親（元秀子息）は、周辺の有力武将らと姻戚関係を結んだり、同盟関係を構築したりしながら勢力拡大をはかった…」というのが軍記物をベースにしたお決まりのストーリーです。

最も著名な当主元親（国親長男）は、この時代状況を踏まえて颯爽と登場する訳ですが、「姫若子」と呼ばれたうつけ者が、永禄3年（1560）の初陣を経て家督を継ぎ、一気に「土佐の出来人」と呼ばれるようになった過程はまさに軍記物の典型です。また、土佐統一から四国平定の野望を持って阿波・讃岐・伊予へ侵攻した経緯についても、これまで軍記物を根拠として語られることが多かったように思います。

今回の特別展では、可能な限り原文書（一次史料）から情報を引き出し、この時期の長宗我部氏の置かれた状況や、具体的な活動を検証してゆきます。

では幾つか展示資料を見てみましょう。

若一王子宮棟札（部分）
若一王子宮蔵

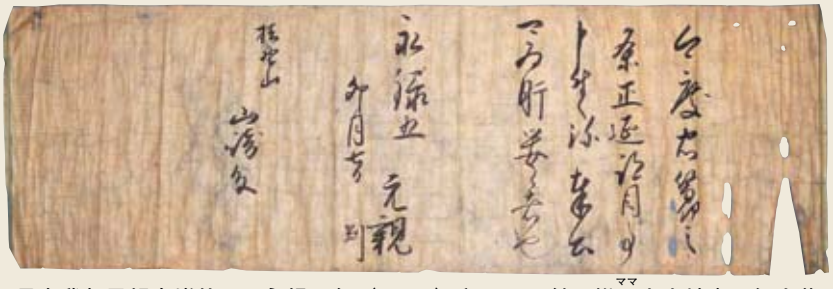
元親家督を継ぐ

棟札には「…大檀那長宗我部宮内少輔秦元親」「永禄四年辛酉九月七日…」とあり、初陣の翌年、永禄4年（1561）に家督を継いでいたことが分かる。元親の名乗り「宮内少輔」使用が家督継承と連動するものであったことも確認できる。

家臣との絆を深める

初公開

香美郡大忍庄槙山（香美市）の山崎氏は元々山田氏の配下だったが、同氏滅亡後は長宗我部国親の家臣となった。元親は、父が亡くなると、こうした家臣達との契約を結び直し、自身の支配力を強化した。本史料は、元親の強敵本山氏との合戦に従軍した山崎氏に、先祖伝来の土地の相続を保証したもの。



長宗我部元親安堵状写　永禄５年（1562）卯月７日付　槙野山山崎宛　個人蔵

長宗我部元親発給永地坪付（前半・後半）　天正５年（1577）12月７日付　依光蔵進宛　円光寺蔵

家臣の要求に応える

土佐を平定した２年後、元親が与えた土地の保証書。わざわざ「永地」という文言を付け、特別扱いにしている点に注目。依光氏は、父国親時代から一定の布教を許された一向衆門徒だったが、道場（寺院）を維持するためには、経済的基盤となる土地が必要であった。元親はこうした家臣それぞれの事情をくみ取り、戦功次第で新しい土地を与えることを約束していたのである。信仰を守るため、蔵進の戦働きはめざましかったが、天正11年（1583）、讃岐引田合戦で羽柴秀吉の武将・仙石秀久の軍と戦い戦死している。

こうしてみると、家督継承など、軍記物と原資料の記載が一致する部分もある一方、軍記物に多く描かれる、いくさ一辺倒の毎日ではなかったことも確認できます。元親が「土佐の出来人」と家臣に信頼された理由の一つには、家臣一人一人の伝統的な権利を保障（安堵）し、戦功をあげた者には相応の特権を与える（宛行）という、大名として最も基本的な仕事を的確に、滞りなく行なったことがあげられます。

元親は、土佐国内の家臣団をまとめる一方、他国の武将たちとの外交も重視しました。話し合いによって盟友（巻頭参照）をつくり出し、無用な合戦を避けたのです。

同盟者を増やし、盤石の構えで四国平定に邁進する元親に対し、それを容認できない織田信長・豊臣秀吉は、相次いで容赦ない攻勢を仕掛けてきました。元親は翻弄されながらも、あらゆる外交チャンネルを使って、干渉をかわそうとしました。そして、秀吉に降伏したあとも、翻弄され続ける運命からは逃れられず、多くの犠牲者を出しました。

今回の特別展では、冒頭にお馴染みの軍記物も展示します。創られたイメージとリアルな元親の対比を存分にお楽しみください。

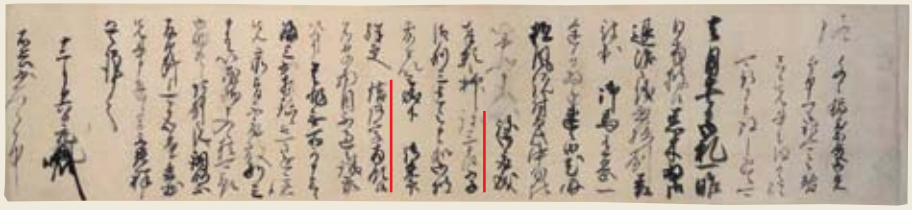
神々に誓いを立てる

長宗我部元親起請文　天正７年（1579）９月５日付　宛所不詳　津野田高廣氏蔵

元親が、信頼する同盟者宛に認めた起請文。ただし牛玉宝印ではない。本状を見ると「御身上」「御機遣」といった丁寧な文言に加え、「たとえ要請がなくても（状況次第では）何をおいても加勢します」とあり、元親が最大級のエールを送っている。年代・内容からして、次男親和が養子に入ることになった讃岐天霧城主・香川信景に送ったものと考えられる。　※本史料はパネル展示となります。

初公開　新発見

信長に臣従する元親



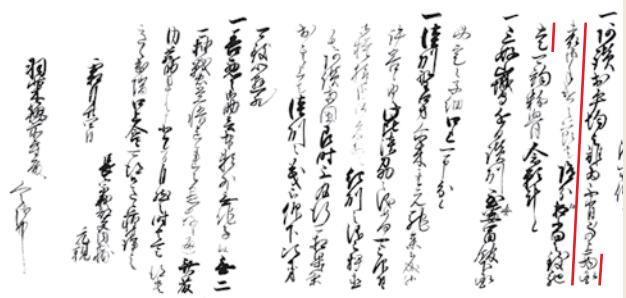
長宗我部元親書状（天正６年）12月16日付　石兵少（石谷兵部少輔頼辰）宛　林原美術館蔵

軍記物によれば、天正３年（1575）、土佐を平定した元親は、明智光秀を通じて織田信長に臣従したとされる。元親の正室の実家が光秀の重臣と縁戚だったことからも概ね史実とみられていた。今回発見された元親書状によれば、臣従の証として信長が元親の長男に「信」の一字を与えたことが事実であったこと。ただし、実際に与えたのは数年後の天正６年（1578）であったことが新たに判明した。簡単には人を信用しない信長の性質が垣間見える。

初公開

秀吉のご機嫌をとる元親

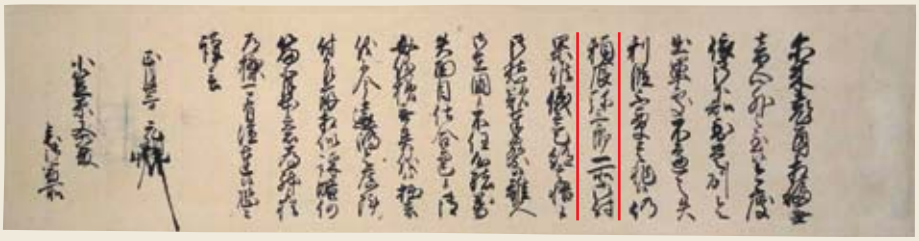
長宗我部元親書状写（後半）
（天正８年･1580）霜月24日付
羽柴筑前守宛
東京大学史料編纂所蔵影写本



元親は、対信長外交において、常に明智光秀を仲介としていたが、織田家中における光秀の立場が微妙になってくると、羽柴秀吉にも書状を送り様子をうかがっていた。本状は現在確認できる唯一の秀吉宛書状である。実に細かく四国の情勢を伝える一方、「西国表御手遣いの節は、随分相当の馳走致し…」（中国攻めの節には全力で協力します）と秀吉経由で述べているあたりが元親らしい。

初公開　新発見

感情を顕わにする元親



長宗我部元親書状（天正15年）正月22日付　小笠原又六宛　林原美術館蔵

天正13年（1585）、秀吉に降伏した元親は、翌年長男信親と九州に出撃した。そして、島津軍に大敗し信親を失ってしまう。書状のなかで「（石谷）頼辰・弥三郎（信親）一所御討果て候儀、まことに言語に絶えず候」と、無念さをにじませている。豊臣政権のため、元親の払った最大の犠牲であった。これまでに確認されている元親書状のなかで、最も感情表現がストレートな書状である。

軍記物に描かれた長宗我部氏
～天下人に翻弄される元親～

いくさに関する様々なエピソードに脚色や空想をも交えて、人々の関心をひくようにつくられたものが「軍記物」です。江戸時代に多くつくられた軍記物は、版本や写本など様々なかたちで広まり、多くの人々に親しまれました。

長宗我部氏を描いた軍記物もたくさんあります。『元親記』、『長宗我部盛衰記』、『土佐物語』、『土佐軍記』……これらの軍記物には、必ずしも史実を反映しているとは言い難い部分もありますが、長宗我部氏の盛衰を知るうえでの手がかりとなる資料だということはできます。また、現代の我々が長宗我部氏に対して抱いているイメージにも、少なからず影響を与えていることでしょう。そのような視点で軍記物を読んでみるのも面白いものです。

今回は、特別展の副題である「天下人に翻弄された戦国大名」にちなんで、軍記物の中から天下人との関係性がうかがえる部分をご紹介します。中には、天下人・秀吉に「翻弄」される元親のようすが挿し絵に描かれたものも。これらの資料から、皆さんはどのような「元親像」をイメージしますか？前ページの原文書に見られる「リアルな元親」と比較してみてください。（大黒）

秀吉との関係

秀吉に翻弄される元親

口絵の部分。見開きで秀吉と元親が並ぶ。秀吉が吹きかけた花びらを元親が扇で振り払おうとしている。「秀吉に翻弄される元親」を象徴的に表した絵（『絵本豊臣勲功記』8編1巻）

秀吉への降伏

秀吉への降伏を勧められて激怒する元親と、それを諌める長男信親。実際に交渉をしたのは羽柴秀長（秀吉の弟）と長宗我部家の家老だが、本書では片桐且元と信親が話をつけて元親を説得したとされている（『絵本豊臣勲功記』9編2巻）

果てしなき奉公のはじまり

秀吉への降伏後、二条城に出仕する元親・信親。実際には元親が訪れたのは京都の屋敷や大坂城とされ、信親が同行した記録はない。多くの貢ぎ物を持参しているようすが描かれている（『絵本豊臣勲功記』9編2巻）

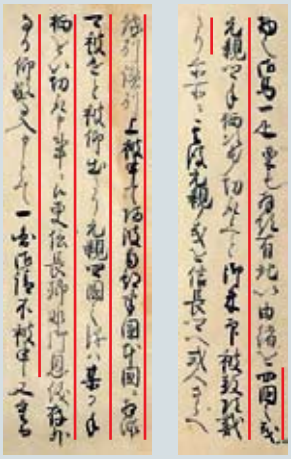
信長との関係

鳥なき島の蝙蝠

……信長公寔にと笑わせ給ふ、「元親は無鳥嶋の蝙蝠也。」と仰けれハ……

信長が元親を評したことば。解釈については諸説あるが、おおむね「鳥さえも住まないような辺境の地に住む、敵か味方か分からない存在」と解釈されている（『土佐物語』10）

信長への不満



……四国之義ハ元親卿手柄次第切取候へと御朱印被致頂戴たり。……

「予州・讃州上被申て、阿波南部半国、本国ニ相添可被遣。」と被仰出たり。元親、「四国之儀ハ某か手柄を以切取申事ニ候。更信長卿非御恩儀。存外なる仰、驚入申。」とて、一円御請不被申。……

四国に関しては元親の好きにしてよいと朱印状まで出しておきながら、後に本国と阿波南部の2郡以外の全てを返すよう要求した信長。約束が違うと元親は反発する（『元親記』巻中）

岡山の戦国大名 宇喜多氏について

岡山県立博物館　内池　英樹

交流3年目を迎える今年度は、両県を代表する戦国大名 長宗我部氏と宇喜多氏を取り上げることにいたしました。そして、これまではそれぞれの会場で異なる展覧会を行ないましたが、今回は両方の館で、ある程度共通した内容の展示を行なえるように計画しています。

岡山県を代表する戦国大名宇喜多氏は、岡山県南東部（現在の瀬戸内市）に本拠を置いていたと考えられる国人領主です。残念ながら確かな資料がないため、詳細は不明ですが、宇喜多能家（生年不詳～天文3年（1534））の頃から、備前国の支配をしていた浦上氏の元で活躍していたことがわかっています。

絹本著色宇喜多能家肖像（図1　重要文化財）は、16世紀前半の武将を描いた貴重なものであると共に、宇喜多能家が浦上氏のもとで戦闘において比類無い活躍をしていたことを伝えてくれます。

ただ、能家は同じ浦上氏家臣に暗殺されてしまい、孫の直家は多難な幼少期を送っています。やがて元服した直家は、浦上宗景（生没年不詳）のもとで頭角を現し、現在の岡山県西部（備中国）の有力国人・三村氏をはじめとした各地の国人たちを倒していきます。最終的には主君である浦上宗景を天正3年（1575）に居城・天神山城から追い出し、備前国の覇者となりました。

図1　絹本著色宇喜多能家肖像（部分）

さらに勢力を増していった宇喜多直家は、備前・美作国の戦国大名へと成長していきます。しかし、織田信長と毛利輝元の間に挟まれ、帰属については大変な判断を迫られることになります。

直家については、戦国時代の大名の中でも「悪」の代名詞のような表現をされますが、これは江戸時代に書かれた『備前軍記』等の評価をそのまま使っているために起こったことです。江戸時代の価値観からすると、主君を変えることや、暗殺することなどは好ましくなかったのでしょう。江戸時代の評価が、そのまま現在まで直家評として生きているのです。

今回の展覧会では、直家が生きた時代に書かれた書状（図2）等を紹介しますので、直家がどのような人物だったのかを知っていただければと思います。

図2　宇喜多直家書状

さて、直家は天正10年（1582）に亡くなり、幼い秀家は豊臣秀吉のもとで育てられます。ちょうどその時に、備中高松城の戦いが起こっています。今回の展覧会には、高松城の近くにある吉備津神社の史料を中心に、一次史料からわかる高松城の戦いの様子を再現しようと考えています。清水宗治や黒田官兵衛の書状など、岡山県外で初公開の史料がありますので、ぜひこちらもご覧ください。

宇喜多秀家（元亀3年（1572）～明暦元年（1655））は、岡山城下町の整備や宗教勢力の整理を行ない、岡山城を中心とした領国経営を行ないます。秀家は文化にも造詣が深かったのですが、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで敗れ、薩摩国への潜伏を経て、八丈島へと流されてしまいます。彼の地において、83歳で亡くなりました（図3）。

図3　宇喜多秀家墓

戦国時代の岡山県で、能家、直家、秀家とかけて成長し、そして、長宗我部氏と同じく、関ヶ原の戦いを契機に、日本の歴史の中から消えていった宇喜多氏。

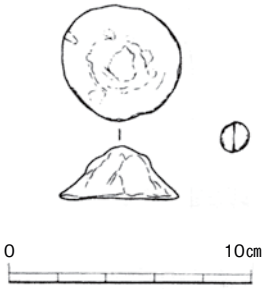
今回の展覧会を通して、宇喜多氏や長宗我部氏が残した足跡をしっかりと見て、彼らの生き様を感じ取っていただければ幸いです。

※図1・2はいずれも岡山県立博物館所蔵品です。
図3は、大西泰正氏提供です。

考古　国史跡・岡豊城跡の鉛製品

高知県立歴史民俗資料館の立地する岡豊城跡の整備のため、第6次の学術発掘調査が四ノ段で平成2年（1990）6月11日から7月30日まで行なわれました。四ノ段からは、礎石建物跡1棟、礎石列2列、土坑1基、円形粘土状遺構、四ノ段を取り囲む土塁と裾石が見つかりました。遺物には、土器や陶磁器片（染付・白磁・青磁・備前・常滑・瀬戸など）のほか、土錘、羽口、坩堝、銅製引手金具、鎧飾金具、鉛製の弾丸、鉄製鍵、円錐状鉛製品、鑿状工具、犬型土製品などがありました。この中に鉛製品2点が存在しています。一つは火縄銃の弾丸、もう一つが円錐状鉛製品、つまり鉛のインゴットです（図）。この鉛のインゴットが注目されたのは、2010年ころのことで、出土例のあった九州地方でした。室町時代の銅製品に含まれる鉛は中国産、そして日本産も検出されています。しかし、鉄砲の伝来により鉛は弾丸の材料として必要視されました。

円錐状の鉛製品は、平成23年度の時点で①大分市御府内1点、②長崎市万才町2点、③南国市岡豊城跡1点のみで確認されていました。この鉛製品は、1600年にマニラ沖で沈没したスペイン船サンディエゴ号からも見つかってます。この鉛製品は近年の鉛同位体の分析研究から、タイのカンチャナブリ県のソントー鉱山のものと推定されています。なお、鋳型も確認されています。（岡本）



鉛製品　国史跡岡豊城跡
『岡豊城跡Ⅱ』1992年より

歴史　「深渕神社の芝居絵屏風」開催！

今年も8月1日から31日の1か月間、コーナー展として「深渕神社の芝居絵屏風」を開催しました。本展は、香南市野市町の深渕神社から寄託された12点の屏風を毎年数点ずつ公開するという企画です。3回目となる今回は、「仮名手本忠臣蔵」を描いた2点。

当時の人にとっては、絵を見ただけでどの作品のどの場面かがすぐに分かったのでしょうが、現代の我々にとってはそうもいきません。絵の美しさ、恐ろしさだけでなく、描かれた場面の内容からも楽しんでいただけるよう、同時に「仮名手本忠臣蔵」の謡本も展示しました。セリフを読みながら絵を見ると、描かれた場面がよりリアルに感じられるのではないでしょうか。

コーナー展は来年以降も続けていく予定ですが、今後もこのようにちょっとした工夫をしながら、屏風をお見せできればと思います。（大黒）

（屏風の展示パネル）

『仮名手本忠臣蔵』館蔵

（部分）刀逆手に取直し。弓手に突立、引廻す。御台二目と見もやらず、口に称名、目に涙。廊下の襖踏開き。かけ込ム大星由良助。主君の有様見るよりも。はつと計にどふどふす。跡に続て千崎、矢間。其外の一家中、ばら〳〵とかけ入たり。

民俗　写真集を編集する

企画展「田辺寿男の民俗写真4　たましいの四季」を来年1月2日から開催し、あわせて写真集を刊行します。これまでの写真集には田辺さんご本人が用意した写真がありました。しかし、今回は田辺さんのご逝去後のはじめての刊行であり、写真の選択から編集をはじめなければなりません。

先日、それらを写真同人「現」の月例会で検討してもらいました。「これは田辺さんらしい写真やね」、「これは作品をつくろうという意図がみえて田辺さんらしくない」、「けんど、そういう写真が1枚くらい混じってもいいかもしれんね」といった皆さんのご意見に、田辺さんの照れくさそうなお顔が浮かんできます。田辺さんが会長を務めた「建依別写壇」元メンバーの小林勝利さんや武吉孝夫さんをはじめ個性的な同人が集う「現」には、同写壇の空気が漂っているのかもしれません。同写壇はもっと厳しく、テーマへの取り組み方や表現の仕方を追求されたそうですが、「現」でも人生儀礼を中心とした私の当初案は「単純で面白くない」と一刀両断でした。

そんな「現」で揉まれ、写真と向き合って、写真集のなかに田辺さんの魂をよみがえらせたいと思います。（中村）

掲載検討中の「子どもの情景」

三原村がやって来た！三原村へ行ってきた！

ー企画展「椿姫の里・三原」を終えてー

梅野　光興

企画展「椿姫の里・三原」が去る6月15日に無事終了しました。期間中は大勢の村民の皆さんも来館されました。また、一般参加者を募り5月11日に「椿姫の里巡り」を実施。ツアーメンバーは村の方々の思わぬ歓迎を受け、大感激でした。地域と連携した博物館の仕事の面白さを実感しました。三原村教育委員会、文化財委員の方々をはじめ、ご協力頂いた皆さん、本当に有り難うございました。

5月3日の歴民の日、中庭で、三原村柚ノ木地区の「太刀踊り」を公演。迫力ある踊りを堪能しました。

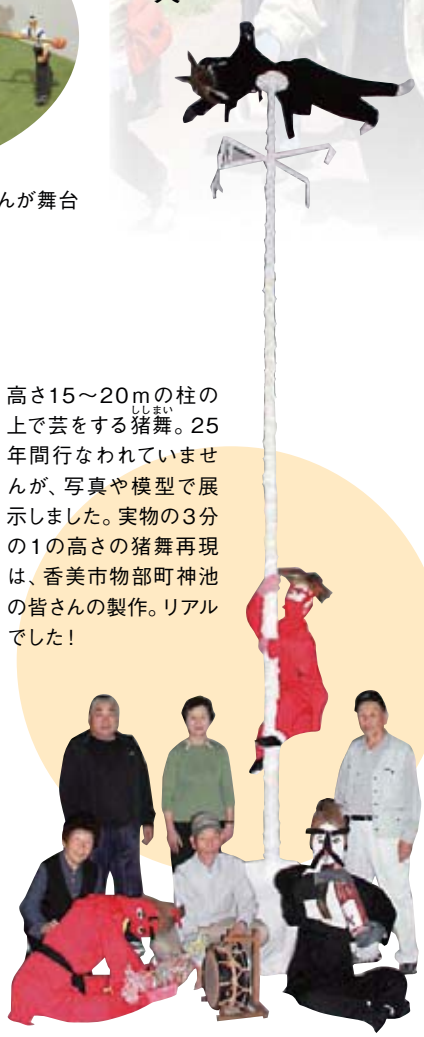
講座「調べて残そう！地域の宝」では県立大・橋尾教授の学生が方言調査の感想を披露しました。

歴民の日には、どぶろく等三原村の物産販売も。大好評でした。

三原村の小中学校の全校生徒をご招待。地元の文化を勉強しました。

椿姫も初めて村外へ。

精巧な猪舞模型は文化財委員の皆さんが舞台を、人形を宮川斉也君が作りました。



高さ15～20mの柱の上で芸をする猪舞（ししまい）。25年間行なわれていませんが、写真や模型で展示しました。実物の3分の1の高さの猪舞再現は、香美市物部町神池の皆さんの製作。リアルでした！

椿姫の里巡り

カタシ（椿等）油の作り方を文化財委員の先生がレクチャー

椿姫の里巡りは好天に恵まれました。猫神様を祀る皆尾では、地元の方々の大歓迎に感動しました。

敷地一族の墓では五輪塔の立派さにびっくり。

平成26年 10月以降の催し

特別展 高知・岡山文化交流事業Ⅲ

長宗我部氏と宇喜多氏

―天下人に翻弄された戦国大名―

平成26年10月11日(土)～12月7日(日)

長宗我部氏編（2階長宗我部展示室）：期間中無休
宇喜多氏編（1階企画展示室）：前期 10月11日(土)～11月9日(日)
後期 11月11日(火)～12月7日(日)
展示替えのため11月10日(月)休室

講演会 11月8日(土) 14:00～16:00 ●要予約・観覧料要
「天下人と長宗我部元親」講師：高知大学教授　津野倫明氏

特別講座(鼎談) 11月16日(日) 14:00～16:00 ●要予約・観覧料要
「石谷(いしがい)家文書(新史料)からみる四国平定戦」
岡山県立博物館学芸課主幹　内池英樹氏　林原美術館学芸課長　浅利尚民氏
高知県立歴史民俗資料館学芸課チーフ　野本　亮

講座・展示解説 10月19日(日) 14:00～16:00●要予約・観覧料要
「長宗我部氏と宇喜多氏」
岡山県立博物館学芸課主幹　内池英樹氏　高知県立歴史民俗資料館学芸課チーフ　野本　亮

展示室トーク 10月26日(日)・11月9日(日) 14:00～15:00
担当学芸員●申込不要・観覧料要

コーナー展

昔のくらしの道具

2015年
1月2日(金)～3月8日(日)

炭火アイロン

電気や水道がなかった時代の生活を昔の道具から探ります。

コーナー展

おひなさま

2015年
2月14日(土)～3月15日(日)

素朴でかわいい郷土玩具のおひなさまや大正時代の豪華な内裏雛などを紹介します。
◆展示トーク　2月28日(土) 14:00～14:30
担当学芸員●申込不要・観覧料要

まゆ雛(群馬県)

バックナンバー・新刊のお知らせ

高知・岡山文化交流事業Ⅱ

『特別展 備前焼
―薪と炎が織りなす土の美―』

A５版　104頁
価　格　1,000円
送　料　300円

NOW PRINTING

高知・岡山文化交流事業Ⅲ

『特別展　長宗我部氏と宇喜多氏　―天下人に翻弄された戦国大名―』

価格未定

10月11日発売！

臨時閉室のお知らせ

平成26年10月1日(水)～10月10日(金)
12月8日(月)～平成27年2月28日(土)

2階長宗我部展示室は特別展「長宗我部氏と宇喜多氏」展示替えのため上記の期間、閉室いたします。

コーナー展

干支(えと)の玩具 羊(ひつじ)

土佐和紙漆喰張子
星のり羊(高知県・草流舎)

2014年11月22日(土)～2015年1月25日(日)

山﨑茂さんのコレクションを中心に羊の郷土玩具を展示します。

◆ワクワクワーク　「羊張り子の絵付」11月23日(日)㊗14:00～15:30
講師：草流舎のみなさん ●要予約(先着30名)●材料費1,200円

◆展示室トーク　1月10日(土)14:00～14:30 担当学芸員●申込不要

予告

冬期企画展
田辺寿男の民俗写真４
たましいの四季

2015年1月2日(金)～3月22日(日)

民俗写真家・田辺寿男の写真展第４弾。私たちが通ってきた道、いつか行く道「人生」を日々の暮らしや冠婚葬祭の写真約100点でたどります。

●講　座　「暮らしの中の人生儀礼」
2月21日(土)14:00～15:00
中村淳子(当館学芸専門員)●申込不要・観覧料要

●展示室トーク
2月7日(土)・3月7日(土)14:00～15:00
担当学芸員●申込不要・観覧料要

七五三（高知市天神町・昭和39年）

岡豊風日（おこうふうじつ）　第87号
平成26年10月1日
編集・発行　（公財）高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088(862)2211
FAX　088(862)2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
観覧料　通常期（常設展）大人（18才以上）460円・団体（20人以上）360円
（特別展・企画展）常設展示込510円
団体（20人以上）410円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp